

I、スター技術者を目指そう！会社を元気にするのは技術者です！スター技術者は「知財力」が高いです！「知財力」が低いと損をします！

1.知的財産を会社経営に取り入れる「知財経営」

1. 知財経営とは、知的財産とは、知的財産権とは
2. 開示知財（オープン）とは、守秘知財（クローズ）とは
3. 特許はステータス、勲章ではない、ビジネスで使うもの
4. 知的財産が持つ「共生と戦い」の特性を使い分ける
5. R&D 部門の「知的基盤（インフラ・プラットフォーム）」を構築する

2.社会の変化と共に何もかもが変わる

1. 世の中が変われば会社経営も変わる、しかし
2. なかなか変わらないのが社員の意識、だから会社が変われない
3. 蝸壺から出られない危険な同質化集団、
4. 「2・8の法則」：蟻の世界と変わらぬ人間の習性
5. 問題意識を持ち続ける人と、思考が停止している人の二極化が益々進む

3.技術開発現場の過去と現在

1. 「黎明期・成長期」における研究開発体制
2. 「成熟期・衰退期」における研究開発体制
3. 筋の良い研究テーマが見出せないのは何故か
4. 指示待ち社員と指示ができない会社との闘い
5. スター技術者を育てない、支援しない会社組織が問題

4.技術開発現場のあるべき未来像

1. 技術者に不足している「能力ベスト10」
2. 創造力を「共有・強化・伝承」させる
3. 情報を「整理・加工」して知識を知恵に変える
4. 発明を計画的に生み出す「知的生産技術」の確立
5. 発明の創出意欲を生む自由な発想を認める社内文化が求められる

Ⅱ、スター技術者になるために必要な「知財力」

1 創造力を鍛える(絶えずクリエイティブであれ)

1. 創造力を生み出すポイントは、発想の転換である。
2. 発想の転換とは「視点の転換」と「新しい発見」への注目である
3. 筋の良い商品コンセプトを生み出すには視点、発想を変え情報を引き回すことである
4. 筋の良い「製品開発コンセプト」とは、どの領域を指すのか
5. 「実験研究」をやる前に「調査研究」をやる勇気を持つ

2.情報感性を鍛える(情報を生かすも殺すも、その人の感性次第)

1. 情報に血を通わせるには、現場の情報から「もの、こと」の本質を見抜くこと
2. 情報は必要とする人、発信する人のところへ集まる、情報は人脈である
3. 答えがたくさん要る時代は「五感」を鍛え、「遊び心」を持とう
4. 情報の質が「情報感度」を鍛える
5. 情報を「構造化・再考造化」してこそ、クリエイティブになれる

3 特許調査能力を鍛える(調査目的を明確にする)

1. 航海図を持った「戦略的特許調査」をおこなう
2. 知財の安全を確認して、事業の優位性を確保する
3. 自社が踏み込んで、危険な技術領域を早く知る
4. 自社が自由に開発できる技術領域を確保する
5. ムダな特許出願を撲滅させる

4.発明提案書の作成能力を鍛える(自己アピールの場である)

1. 発明提案書は発明者にとって自己主張、自己表現の場である
2. 課題を見つける、課題を解決する能力が身に付く
3. 発明提案書を書くことで論理力と文章力が身に付く
4. アイデアを発明に、発明を特許にするプロセスが身に付く
5. 強くて広い強固な特許明細書づくりの土台は発明者が作る責任がある

Ⅲ、教育担当者が技術者と共有しておきたい「キーワード」 良い意味でのドライビングフォースを持つ、「知財創出」の生産効率を高める、スター技術者を支える社内文化がR&D部門を改革する。

1.R&D部門の知的基盤(インフラ)の構築

1. 先人たちの記憶（知識・知見）が会社から消えていく問題がある
2. 情報の「共有、強化、伝承」の知的基盤を構築する
3. 現役世代の創造力も「共有・強化」する
4. 自分に合った創造技法で科学的に知的財産を創出する
5. ウェットコミュニケーションとドライコミュニケーションの使い場所を間違えない

2.筋の良い研究テーマを発掘

1. 社会の変化と変わらない会社のギャップ（ズレ）を埋めるのが新商品の役目
2. 「実験研究」を行う前に筋が良くなるまで「調査研究」を行う
3. 企業が望む「独創性・創造性」とは、誰もが気づかないニーズの探索である
4. 異分野の技術者とのゴツタ煮こそが良い味を出す
5. 素質のある人間が創造力を発揮できる環境を整える

3.情報感度を高め、情報を正しく使いこなす

1. 情報をマネジメントすることで売り上げ、利益を開拓し、競争上、優位になれる
2. 何事も面白いがる、感性豊かな遊び心を持った「T型」技術者になる
3. 「構造化・再構造化」した情報は、創造力そのものである
4. 情報を引き回し多面的に見る、本質を見る目を養い、自分の頭で考える
5. 「問題解決」に使う情報と「課題創出」に使う情報の違いを知る

4.IP(知財)戦争とは詰まるところ言葉の戦争である

1. 知財文書は明快で伝わる文章で書かないと情報の共有ができない
2. 発明提案書の作成が技術者の「発明能力」を高める
3. 発明提案書の作り方を変えるだけで「知財コスト」が劇的に削減できる
4. 世界で通用する（武器となる）特許出願明細書を作る
5. グローバル社会での共通語は英語である、機械翻訳ソフトを使いこなす

6 機械翻訳ソフトの支援が受けられる日本語（文明日本語）で書くことに慣れる

【参考】: 新入社員への知財教育は初めが大事です。特許嫌いにならない「知財教育を」行いたいという要望で、これらのキーワードを使って新人技術者向けに行ったことがあるセミナーを紹介します。

・【2006/05/29 講演録】：特許とは技術者のためにあるのです、こちらから
<https://www.ipma-japan.org/contents047.html>